ダンジョン踏破目次録

名も無きナチス兵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ダンジョン踏破目次録

【Ｎコード】
Ｎ９６４３ＣＲ

【作者名】
名も無きナチス兵

【あらすじ】
死後、高校性であった新道新太（しんどうあらた）は別世界に転移した。
だけども、運悪いことに転移場所はダンジョンの最下層。自称全世界管理者様、別名神様から貰った能力で、あらゆる場所のダンジョンを踏破したいと思います。
殺し合い？　いや喧嘩もしたことありません。
騙し合い？　中高校はバスケットボール部に所属していました。
――本当にダンジョン攻略出来るのかな？

一話　感電死

――たった数秒前に、俺は死んだ。
いや、死んだはずだった。

死因は感電死。充電中のスマートフォンを、入浴途中に風呂の湯船に落としてしまった事から。
――入浴中にパズルゲームなんてするんじゃなかった。今になって後悔する。

それにしても、ここは何処だろう。不思議に思い、周りを見渡す。周囲は何処までも白色が続く、殺風景な風景に包まれていた。本当に、白以外なにも無い。家具も家も空も海も無い。

死後の世界だろうか。それとも、実は俺はまだ生きていて、この世界は意識障害時に現れた、ただの幻覚なのだろうか。
出来れば、生きていて欲しい。まだやりたいことは五万とあるし、食べたいものだって、家族や友人と喋りたいことだってまだまだ沢山ある。未練は数え切れない程残っているのだから。

不意に、肩を叩かれた。心臓が飛び出そうなほど驚いて、勢いよく後ろを振り返る。
――誰だ、コイツは。

振り返った先には、伸びた白髪白髭を生やした、高潔な老人が立っていた。
青色の外套を羽織っており、片手はＢ５サイズの画用紙を掴んでいる。

白色の世界で唯一、俺と目の前の老人だけが色を持っていた。俺が疑問を口にするよりも早く、老人が早口で、片手に持つ画用紙を見つめながら捲し立てる。

「えーっと、性別男。千葉県出身の東京育ち。名前が新道（しんどう）　新太（あらた）君。職業は高校生。年齢は十七。家族構成は父親、母親、そして妹の四人暮らし。趣味はバスケットボールで、部活動も趣味であるバスケット部に所属。他にも、アニメの視聴や小説の読書も好きだったね」

突然に、白髪白髭の老人は俺の個人情報を言い当ててきた。

戸惑う俺なんてどこ吹く風。老人は画用紙から目を外して、俺の顔を覗き込む。

「だよね、新太くん」

「……そうだけど」

顰めっ面を浮かべて、応える。なんなのこの人。俺のストーカーか何かなの？　老人に付き纏われる覚えなんて、ないんだけど。というか怖いんだけど。

表面上とは裏腹に、心中で思いっきり老人を貶していると、爺さんは苦笑した。伸ばした自分の顎髭を触りながら、顔に更なるシワを寄せる。

「――ストーカーなんかじゃ、ないぞ」

「あれ、もしかして口に出ちゃいました？」

失敬失敬。手のひらで自分の口元を押さえると、老人は露骨にウザそうな表情を作った。

「あのね、私が誰だか、分かっているのかな？」

「いや、知らないに決まってんじゃん」

首を横に振る。老人は、身体の中の空気を全て吐き出すかのようなため息を零すと、次に得意気な表情を作る。

コロコロと、表情が変わる老人だ。きっと長生きするんだろう。

そう思いながら、自分に親指をピシッと指してドヤ顔する老人を眺めた。

「聞いて驚け。私は数え切れない程の世界の管理を一任されている、管理者だ。俗に言う、神様だね。マジで偉いから。指先一本で、世界一つ滅ぼせるから、マジで」

「へぇ。それで、その管理者さんが俺に何の用で？」

え？　ちょっとリアクション薄くね？　なんてほざいている自称全世界管理者様の言葉を聞き流して、欠伸する。

どうせ、この世界は幻覚なんだ。気にした所で疲れるだけだ。立っているのも面倒だし、座っていようか。そう思った矢先、老人は細い目を更に細ませ、冷たい声色で言った。

「――君は、死んでいるよ。間違いなくね」

何故、そんなことが分かる。

お前の存在もどうせ、俺が見ている幻覚なんだろ。管理者様は、言葉を継いだ。

「運悪いことに、落とした充電中の携帯は新太くんの心臓付近に沈んだんだ。結果家庭用電流が湯船に流れて、君の心臓は停止した。意識不明なんて生温いものじゃ、ないよ」

「――そうですかよ、くそが」

そんなの気付いていたよ。
ただ、その事実から目を逸らしていただけ。ええ、知っていましたよ、俺自身が死んでいるなんて。

……もう、母さんの手料理は食べられないのか。
父親に叱られることも無くなったし、妹に読書中の漫画を盗られることも無くなりました。クラスの友人と喋られなくなりましたし、好きなあの子の顔も見れない。万々歳じゃないですか。

部活のコーチに口煩く言われることも無くなったし、大会直後のプレッシャーに押しつぶされることもなくなった。最高だよ、楽しい十七年間でした。ありがとうございます。
頬に生温いなにかが伝う。どうやらそれは、俺の目から零れているようだった。

涙じゃありません、心の汗です。泣いてないから、マジで。
俺はその場で蹲った。なんだよ、死因可笑しすぎるだろ。笑えよ。心の中がごっちゃごちゃになっていると、管理者様は俺の背中を優しく摩った。

「あ～まぁ、そんな落ち込まないで。禍福は糾える縄の如しだよ。喜べ、君はあの世界で死んだけど、君の身体を別世界に転移するように仕組んだから」
「……転移って、なんだよ。神様なんだから、俺のこと元の世界に生き返らせてくれよ」
「すまない。それは、ルール上禁止されているんだよ」

なんだよ、ポンコツじゃないか神様なんて。
俺は目に溜まった心の汗を拭うと、おもむろに立ち上がった。正直、まだ死に対する踏ん切りが付いていない。けれど、何時までも

メソメソ泣いている訳にもいかない。

管理者様は俺の背中をポンと叩くと、笑った。どうやらコイツは、俺の心の中が読めるらしい。

「なんだ、つよい奴じゃないか、お前。喝でも入れてやろうかと思ったけど、やめとくよ」

「……それは兎も角、別世界に転移ってなんだよ。アニメで良くあるやつ？」

「まぁ、そんな感じ。実は毎年ごとに抽選で、君の住んでいる世界からたった一人、死んだ人の精神を別の世界に転移させる習わしが、神の間にあるんだよ。この習わしが出来てから実に二百年ほどが経つ」

「つい最近なんだ」

二百年前と言うと、江戸時代辺りからか。俺にとっては大昔のことだが、神様にとってはつい最近の出来事に違いない。

泣いたせいか、頭がじんじんと痛む。鼻を啜ると、俺は着ている洋服に目を通した。

「それにしても、俺入浴中に死んだのに、洋服着てるんだな」

「ああ、男の裸見てもなんも嬉しくないからな。お前が普段愛用している服に、着替えてもらった」

流石神様。小さいところにも気が利く。

今の俺は紺色のジーパンと、中学時代から愛用しているゼブラパーカーを青シャツの上に羽織るような服装だった。更に黒の長靴下に、紐のスニーカーまでもを両足に履いている。

「それで、何処に転移させるとかは、決まってるの？」

「ああ、もう決まっているけど……さっきまで泣いてたのに、なんか今はあっさりしてるな」
「だって死んだ原因は完全に俺の不注意だし、どうこう騒いでも、もう仕方ないでしょ。それに、アニメの転移ものって大好きだったし。で、どんな世界に転移させてくれるのよ」
「……あまり急かすな」

管理者様は再度、画用紙に目をやった。恐らくそこに、俺のデータ等が記入されているのだろう。
逸る気持ちを押さえつけて、宣告を待つ。俺は既に死んでいるというのに、心臓の鼓動がどくんどくんと力強く跳ね上がるのが感じられた。こんなに緊張するのは、高校の合格発表時以来だ。

「おお、これだこれ。えっと、い―２８番の世界だ」
「い―２８番の世界？」

もしかして管理者様は、世界のそれぞれを番号表記で表しているのか？　なんだか分別された化学薬品みたいで、嫌な感じ。
管理者様は、画用紙をそこいらの方にポイ捨てすると、右手で指を鳴らしてみせる。

「こんな世界だな。映像を今流す。一度しか流さないから、心して見ろ」

周囲の色が一気に黒色に変わり、俺と管理者様の目の前に八十インチ程のテレビモニターが出現した。
プツンという電子音を発して、テレビモニターが青白い光を発する。

暗闇の中輝くモニターの映像を、俺は眼に焼き付けながら眺めた。

第二話　転移からの地下迷宮

周りの景色が黒色から白色に変わって、テレビモニターに映っていた映像が途切れる。

「どうだ。今見た映像が、新太くんがこれから転移する世界だ」

「マジでやばいっすわ。いやもう、神様仏様ホントありがとうございます」

両手をすりすりと擦り合わせて、誠心誠意の篭った礼を口にする。

映像を見て分かったことは、今から俺が行く世界は、俺が元々住んでいた世界の構造や世界観とは大きく異なる事だった。

まず一つ目。剣や魔法が使える。

それだけでもご飯三杯はいけるのだが、他にも魔物は蔓延っているわ、勇者や魔王は居るわ、デミ・ヒューマン（亜人）と呼ばれる猫耳っ子、犬耳っ子、果てには兎耳っ子や狐耳っ子も存在していると、至れり尽くせりである。

端的に言うならば、アニメでよく見る異世界もののような世界観。技術進歩等が大きく違ってきて、最初の頃は戸惑うと思うだろうが――その内慣れるだろ。

俺が心中でガッツポーズを取っていると、管理者様が指をパチンと鳴らした。それと同時に現れたのは、ハテナボックスのようなものが二つ程。大小の大きさはそれぞれ異なっていた。

左の方が、小包ほどの大きさ。右の方が、段ボール大ほどの大きさ。管理者様はボックスの外側を手で叩くと、愉快そうに言った。

「気に入ってもらえたのなら、幸いだよ。まぁ、それはそうと。転移と言ってもな、転移先でまた死んじゃったら、他の世界に再度の転移は出来ないのだよ。何故ならこの習わしが通っているのは、君の世界だけだから」

「なんで、俺の住んでいる世界だけなんですか？」

「ああ、実は君の住んでいた世界以外の所となると、個人個人の力が凄まじいものになるんだよ。魔法を使えたり、寿命が長かったりとな。そんな輩を他の世界に転移させたら、均等に保っていた世界のバランスが崩れてしまう。だから、魔法も特殊能力も扱えない君たちの世界でしか、この習わしは通用しないんだ」

なんだか、さり気なく馬鹿にされた気がする。

こっちの世界だって、集団戦になれば強いんだからな。別に悔しくねーし。悔しくねーし。

「そこで、だ。魔法も使えない君が他の世界に転移したら、十中八九一日も持たずに死んでしまう。だから、私からこの二つのボックスの内、一つだけプレゼントをやろう」

管理者様は小包ほどの小さなハテナボックスを持ち上げると、言葉をつむぐ。

「この箱の中には、向こうの世界で通用出来るような『能力』が納められている。この箱を選べば、君も手の平から炎や水を出せるようになるよ」

へぇ、凄いじゃん。

出来れば氷を扱えるようになって、長年夢見ていたアブソリュートゼロを実現させてみたいものだ。

次に管理者様は段ボール大ほどのハテナボックスを抱き上げて、言った。

「そしてこの箱の中には、強力な『武器』が入っている。剣だったり、銃だったりと。すぐに使いこなせるように、武器を『設定』してあるから、使いこなせないなんて悩みもなくなるだろうね」

成る程。『武器』を選択するか、それとも『特殊能力』を選択するか選べということか。

腕を組んで思考する。能力の方と違って、武器の方は使いこなせるように設定されてあるらしいから、お得だ。だけど、能力（ロマン）も捨て難い。

さて、どうする。ロマンを捨てて使いやすさを選択するか、使いやすさを捨てて、難易度を上げるか。選べるのは一つだけ。

――いや、どちらを選ぶなんて、既に決まっているじゃないか。

俺は小さい方のハテナボックスを、手に掴んだ。

「そっちで、いいのかい？」

「ああ。やっぱり男は、ロマンを選ばなきゃね」

小さなハテナボックスを握りつぶす。瞬間、体中を電流が流れ、俺の意識は暗転した。

？

頬に冷たいものを感じて、そっと起き上がった。

寝ぼけ眼を擦って周りを見回すと、まず初めに岩で出来た、ごつごつの茶色い壁が目に入ってくる。

壁に手をやりながらゆっくりと起き上がると、足の爪先が何かを蹴った。身を屈め持ち上げると、一冊の国語辞典のような分厚い本が見える。題名は『取得能力、操り人形（マリオネット）について』

寝起きのためか、以前の記憶が曖昧だ。壁に背をやったまま思考すると、突然にゼブラパーカーのポケットが揺れた。

なんだなんだと驚き、咄嗟にポケットに手をやると、スマートフォンがバイブモードになって震えている。

――スマートフォン、ね。漸く記憶が戻ってきた。俺の命を枯らしたスマートフォンを睨みつけると、液晶画面に目をやる。どうやら着信によって携帯は震えているらしい、相手は公衆電話から電話を掛けているのか、画面は非通知だった。

親指で画面を右方向にスライドさせて、電話に応答する。電話を掛けている相手は、なんとなく想像出来た。

「もしもし、何方ですか」
「あ～オレだよ俺。神様だよ」
「新手の詐欺かなんかですか。切りますね」
「待って。ふざけないから会話しよう」

受話口から耳を離そうとするなり、電話越しに話す管理者様は焦ったように言った。

茶番は止してほしいものだ、面倒だから。まず、この状況を理解するために、俺は管理者様に質問を投げ掛ける。

「てか、ここ何処ですか？　俺は能力を取得出来たんですか？　仮

に異世界行けたとして、言語や文字は読めるんですか？　そこら辺、どうなってるんですか？」

「一気に質問するなよ。じゃあまず一つ目の質問に対する答えね。今新太くんが居る所は、異世界の地下迷宮（ダンジョン）だよ」

「はぁ！？　ダンジョンってあの、モンスターとか出てくる所？」

「そう。そのダンジョンの、最下層。ボスが潜んでいる階に新太くんは居るんだ」

マジふざけんな。最初からクライマックスじゃないか。まだ能力も扱えていない俺に、その行為は鬼過ぎる。例えるなら、ゲームの説明書も読んでいないのに、ラスボスに立ち向かうような感じ。

無理難題。クリア不可能。ゲームだったらやり直しが効くが、俺の命は一個しかないんだ。ここで死んだら即、人生自体がゲームオーバー。やり直し不可。

「……マジでふざけんな」

「ごめんごめん。転移場所ミスっちゃってさ」

「ごめんじゃないから。死んだらどうすんの俺」

管理者様、軽すぎるだろ。伝えた待ち合わせ場所間違えちゃってさ、みたいな気軽さだぞコイツ。

知らず知らずの内に、陰鬱なため息がこぼれた。ああ、緑色のキノコ取ったら命一個増えないかな……。

「まぁ、きっと大丈夫だよ。新太くんは強い能力を手に入れたし、ここのダンジョンも、他のダンジョンに比べると比較的難易度が簡単な方だから」

そんな他人事な……。そう言おうしたが、代わりに二度目のため息がこぼれた。

それにしても、俺が新しく来たこの世界には、ダンジョンが数多く存在しているのか。できれば、貰った能力を完全に使いこなせるようになってから、入りたかったものだ。

周囲は薄暗くて、壁に掛かっているキャンドルランタンの炎が不気味に輝いている。どうやら、俺が今居る場所は１０畳程の広さをした休憩所のようだった。この場所にはモンスターは出現しないし、光もある。それが唯一の救いって所か。

視線を周りに巡らせていると、一箇所に止める。視界の先には、古びれた鉄製の扉があった。

どうせ、扉を開けた先にはダンジョンの、最下層ボスが俺を襲うんだ。俺の背後に目をやると、階段が見える。恐らく階段を登った所で、一階上のモンスター達が俺を襲うのだろう。前も後ろも手詰まりだ。

言葉そのままの意味で、お先真っ暗。引き返せない、進めない。絶望的状況。

「お～い。新太くん、大丈夫か」
「大丈夫じゃない。どうあがいても絶望だよこれ」
「そうでもないぞ。能力を使えば、踏破出来る。手元に一冊の分厚い本があるだろ、それは君が手に入れた、能力の取扱説明書みたいなものだから」

管理者様の声を聞いて、十センチ程の分厚さはある、一冊の取説を見やった。

――分厚すぎませんかね。読書は好きな方だけど、こんな気の休まらない場所で穏やかに読書なんて、できっこない。それに、こんなに厚いと数時間は掛かりそうだ。

速読をマスターしておけばよかった。いや、今現在、その能力をくれた相手と話しているのだから、能力の重要な点だけを教えてもらえば良いのではないか？

天才的発想。いや、機転の良さか。学校での成績はあまり良いものではなかったが、窮地に追い込まれると意外にも、活路を見いだせるものだ。

「じゃあさ、能力の重要な点を教えてくれよ。ハッキリ言って、こんな状況下で悠々自適に読書なんて出来ないし」

「ん～それもそうだな。じゃあ、重要な点を今から言うから、良く聞いて――」

そこで、管理者様の言葉は途切れた。疑問に思い、液晶画面を見るなり俺は、絶望に明け暮れる。

「――マジかよ、充電切れ」

スマートフォンを地面に叩きつけて、へたり込む。どうやら俺は、スマートフォンに妬み恨まれているらしい。

ああ、終わった。最後の希望の綱も切れてしまった。頭を抱え込んで蹲ると、不意に部屋の片隅に何かが落ちるような音がした。

疑問に思い、地面に膝を付けたまま音のした方に向かう。部屋の片隅には、新しい青色のスマートフォンが転がっていた。

「――よっしゃあ！！　神様やるじゃん」

携帯を取り上げるなり、バイブレーションでスマートフォンが震えだす。すぐに電話に応答すると、受話口に耳を付けた

「もしもし。神様聞こえる！？」
「――あ……め――な」
「あれ？　どうした、聞き取りづらいんだけど」

管理者様の声に混じって、ノイズが混入している。そしてその数秒後、管理者様の声は一切聞こえなくなった。
どうなっているんだ。画面を見るが、今度はちゃんと、電源が入っている。充電残量は６５％と、まだまだ余裕はありそうだ。

携帯の左上端に、視線を移動させる。そして俺は、戦慄した。

「――圏外表示じゃねぇか！！」

？

天井かよ。俺はスマートフォンを地面に再度、叩きつけた。

部屋の空間に落ちてきた、三つ目の赤色スマートフォンを取り上げると、電話に応答するなり苛立ちを隠せないような口調で、言った。

「え？　マジでわかってんの？　天井とかマジ最悪だわ、時間返せよオイ」
「ごめんなさい。ごめんなさい……」

管理者様（神様）に説教垂れる機会なんて、滅多にないな。本当はもう少し弄りたいが、時間が惜しい。取り敢えずは能力に関しての質問が、最優先だ。

「まぁいいや。それよりさ、能力の重点早く教えてよ。こっちは神様と違って、時間限られてんだよね」
「はい、はい……わかりました」

まるでクレーマーと、クレームに対応する受付嬢のようだ。これではどちらの立場が上なのか、分かったものじゃない。
管理者様は、俺に授けた能力の重点を、淡々と話す。俺の説教が終わったことにより、元のテンションを取り戻していた。

「えっと、新太くんの手に入れた特殊能力は、操り人形（マリオネット）っていう名前だね」
「操り人形（マリオネット）？　強いの、それ」
「ああ、結構強い部類に入ると思うよ。攻撃方法は全部で二つ。人形を作り出して、それで攻撃するか。作り出した人形を取り込むことによって、自分をパワーアップさせるか」
「へぇ……なんか面白そうだな」

マリオネットか……。そうだな、二つ名は『人形師』とかにしよう。いや、それとも『朱色の絡繰り師』ってのも捨て難い。
頭の中で二つ名を悶々と考えていると、受話口越しに管理者様の聴き慣れた声が聞こえる。利点の次は、操り人形（マリオネット）に対する難点を口にするようだ。

「操り人形（マリオネット）による人形の形成は、全部で百体ほど。だけど、人形を動かすには命令が必要だから、多くの人形への命令は、過度なリーダーシップが必要だね」
「リーダーシップか……一応、二年の頃はバスケ部のスタメン張ってたから、命令するのは得意だったけど」
「だけど、それはたったの数人程度でしょ。数十人への命令はかな

り難しいよ。まぁ、使い慣れるようになったら、この能力はかなり効果を発揮するようになるけど」

命令、か。

頭の中を整理しつつ、瞬時に状況を把握して、機転を見出す。戦いの場での場合、戦略を常に変えていかないといけなさそうだ。

チェスや将棋でもやっておけば良かった。まぁいずれにせよ、俺は後方で支援するような形になるのは必然的だろう。俺のことを自発的に支えてくれるような、そんな仲間が欲しいところだ。

いや、待てよ。確か管理者様はさっき、攻撃方法は二つと言っていた。一つは、人形を使用しての攻撃。もう一つは、確か――。

「なぁ、人形を取り込んで自らをパワーアップって、どういう意味だ？」

「そうだな。例えば新太くんが一体の人形を形成したとして、その形成した人形を取り込む場合、君の攻撃力、俊敏力、反射神経等が全て、パワーアップするんだよ」

「取り込む方法と、基本となる人形の形成方法は？」

「形成方法は、頭の中で人形を作り出すようなイメージを浮かべるんだ。そしたら自ずと、君の傍らに人形が出現するよ。一回、試してみ」

管理者様の言う通りに、頭の中で人形を作り出すようなイメージを浮かべる。すると不意に、自分のすぐ傍から、物音がした。

音のした方向を向く。目の先には白色の、八頭身ほどの大きさをしたマネキン人形が立っている。

突然のことに、驚愕する。マネキン人形は、片手にバタフライナイフを所持していて、まるでこのシーンだけを切り取ったら、ホラ

ー映画のようなシュチュエーションだった。
昔見た、小さな殺人人形が次々と人を殺していく映画を思い出して、怖くなる。動くのかと、試しに頭の中でマネキン人形を歩かせてみた。

……歩いた。
人間のように、片足とその逆の腕を動かして、人形は歩き出す。やがて壁の方に当たり、頭の中で人形をUターンさせてみると、反映するようにマネキンは、現実にUターンをする。

「……なんだか、ホラー映画みたいだ」

こちらに向かってマネキンが突き進んでくるので、動きを止める。のっぺらぼうのはずなのに、目の前に立つマネキンが俺を睨んでいるような気がした。

「まぁ、その内慣れるさ」
「そうだといいけど……。まぁ、兎も角。取り入れる方法は？」
「簡単だよ、人形の頭を叩けば、頭を叩かれた人形は光の粒子になって、新太くんに吸収される」

試しに、マネキンの頭を叩いてみる。すると、人形の身体は消えて、代わりに光輝く綺麗な粒子へと変化し、俺の方に吸い込まれていった。
一歩、足を踏み出す。部屋の中央をぐるぐると駆け回ってみると、確かに身体が何時もより軽い――ような気がする。

「まぁ、一体だけじゃ分かりにくいけど、確実にパワーアップされているよ」
「すごいなこの能力……あ、あとさ。一日に出せる人形の数って、

決まってるの？」
「別に決まっていないよ。一度における人形形成の限界が百体ほどで、一日における形成限界は決まっていない」
マジか。それだと、永遠に人形を形成して、頭を叩いてパワーアップという作業ゲーができてしまう。
そんな俺の考えを看破したように、管理者様は言った。
「ついでに言うと、パワーアップによる吸収は一日に十体までしか出来ない。それも、一日経つと元の身体に戻っちゃうから、気をつけてね」
「だよな。そう上手くいかないよな」
知っていました。ただ少しだけ、希望を持っただけです。
俺は二体の人形を形成して、命令した。一体には目の先に在る扉を開けるように。もう一体には、扉を開ける人形の援護（カバー）。両方とも、片手には何かしらの凶器を所持している。
「分かった。それじゃあ、一度切るわ。今からダンジョンのフロアボスに挑んでくる」
「くれぐれも、死ぬんじゃないぞ。分からないことがあったら、電話をくれ。常時暇だからさ」
「了解。それじゃあ、行ってきます」
通話終了ボタンを押すと、右側のマネキン人形――これからはマネキンＡと呼ぼう――が、扉を開けて、左側のマネキンＢが、部屋の外を出た。

第三話　フロアボスと猫耳少女

俺の命令に従って行動するマネキン人形Ｂが、扉の外を出た。
そしてマネキンＡに再度命令。内容は俺の援護。ついでにマネキンをもう一体作り出してから、俺も休憩所を出る。

新しく作り出したマネキンＣにも俺の援護を命令すると、不意に休憩所の後ろが音を立て閉まり、辺り全体が眩しい光に包まれた。
あまりの眩しさに、目をしばたく。やがて光に目が慣れて、そっと真正面を見据えると、巨躯な怪物が俺を睨んでいた。

全長十メートルはあるのではないか、腹の出た薄汚いピンク色の豚が、短い両足で立っている。
片手には巨大なスレッジハンマーを、もう片手には円盾を持っていて、琥珀色の瞳が俺をじっと見つめてた。

マネキンＢが行動を停止させていたので、取り敢えず俺の援護を命令する。周囲はただっ広くて、蛍光灯器具もなにも無いのに、何故か眩しい光が辺りを染め上げていた。
目の前に立つ豚が、この最下層のフロアボスだろうか。よく目を凝らすと、豚の背後には目も眩むような金銀財宝と、正方形の檻に閉じ込められた少女が見える。

――あれ、あの女の子、猫耳っ子じゃね。
薄汚い豚から目線を外し、檻に囚われている少女を眺める。銀色の髪に、猫耳。そして純白のワンピースを身に纏い、十代後半ほどだろうか。幼げの混じった、可愛らしいその顔が俺の心を射止める。

……絶対に、救い出してみせる。彼女のためにも、俺のためにも。

小さな笑みを零すと、マネキン四体を形成。声を張り詰めて、叫んだ。

「――マネキンA～Cは俺の援護。そして今形成したマネキンD～Gは目の前に立つ豚を屠れ！！」

俺の命令と共に、凶器を持つ殺戮マシンが豚に向かって、突進した。

どうやらフロアボスである豚は、自分に敵意を持った者が出ない限り、暴れてこないらしい。が、こちらに向かって突進してくるマネキン達に敵意を感じたのか、スレッジハンマーを持ち上げ、力強く咆哮する。

なんつー声量だ。鼓膜が破れてしまいそうな、それほどまでに煩い咆哮が、広い空間に響き渡った。だが、人形は平気そうな顔――といっても顔は無いのだが――で、豚を屠るべく猛牛のように、突進する。大理石のような床の上を駆け、カンカンカンと小気味良い足音が聞こえてきた。

豚の方も、二足歩行で駆け上がる。やがて大きなハンマーの射程圏内にマネキンが入ると、豚はスレッジハンマーを振り上げた。

俺がマネキンに令した内容は一つ。豚を屠ること。敵の攻撃を避けろとは言っていない。そのことに気づくと、できる限りの大きな声量で叫ぶ。

「振り下ろされるハンマーの攻撃を避けろ！！　マネキンD～Gは後方にステップバック、その後豚の両足を手に持つ凶器で掻っ切れ！！」

俺の命令通りに、人形たちは後方に下がった。スレッジハンマー

の渾身の一撃が、大理石の床に振り下ろされる。
衝撃音が響き渡り、部屋全体がぐらぐらと揺れた。思わずバランスを崩すと、傍に立つマネキンAが俺を抱き抱える。

礼を言ってから立ち直ると、マネキンたちが左右二人ずつに分かれて、駆け巡る。豚は地面にめり込んだスレッジハンマーを少し持ち上げると、横殴りに右側のマネキンDとEをハンマーの柄で殴り飛ばす。
二体のマネキンが、部屋の支柱にぶち当たると、消滅する。どうやら彼らマネキンは、攻撃を一撃でも食らうと、消滅する仕様に作られているらしい。

二体消えたが、もう二体生き残った。マネキンFとGは、それぞれ手に持つボウイナイフとタガーナイフで豚の足を掻っ切ると、行動を停止。鮮血が大理石の周辺に飛び散る。
命令を達成させたから行動を停止させたのか。ならばと思い、俺の護衛をしてくれていたマネキンも使って、再度命令。

「マネキンA～Cは豚に突撃。FとGは相手が倒れ伏せるまで、豚の足を切り、刺し続けろ！！」

そろそろ、俺も戦闘に参加しようか。先程からアドレナリンが分泌され、戦意が溢れ出て仕方無い。
豚に向かって突撃するマネキンA～Cを見送りながら、もう五体マネキンを形成させると、作り出したマネキンの内四体の頭を叩いて、自らをパワーアップさせる。そして残った一体が手に持つファイティングナイフを奪ったあと、大理石の上を駆け出した。

身体が軽い。まるで、羽でも生えたかのようだ。豚の足を切り続けているFとGは、相手が手に持つ円盾で押しつぶされると、消滅

する。だが、足を切り続けたその甲斐あってか、豚の両足は震えていた。これが期だと言わんばかりに、走りながらマネキンA～Cに命令する。

「マネキンAとBは相手の攻撃を避けつつ、相手の両足を切り続けろ！！　マネキンCは俺の援護！！」

形成されたマネキンたちが、抽象的な命令に従ってくれて助かったと思う。具体的な命令を常時出せるほど、俺は頭の良い方じゃない。

豚は足を切り刻まれたことに腹を立てのか、二度目の咆哮を響かせた。俺は咄嗟に耳を塞いで立ち止まってしまったが、人形はそんなものお構いなしに、敵の足元に近づくと、身を少し屈ませ足を切り刻んだ。

痛みに豚の表情が歪む。豚は数歩後方に下がると、手に持つスレッジハンマーを振り落とした。マネキンAはなんとか避けれたが、マネキンBがハンマーに叩き潰され、消滅してしまう。

残ったマネキンAは手に持つブッシュナイフの刃先を、豚の右足に思いっきり刺した。灰色の刃が血に濡れ、赤く染まる。

豚は漸くバランスを崩すと、地面に仰向けに倒れた。立ち上がれずに、滑稽にもスレッジハンマーをぶんぶんとがむしゃらに振り回している。

「マネキンAは仰向けに倒れた豚の首を切り刻め！！　マネキンCは先程と変わらず、俺の援護！！」

敵の傍らにまで近づいた俺は、豚が振り回すスレッジハンマーを避けつつ、俺の胴体ほどの太さもある首元に、ファイティングナイ

フの刃先を突き刺した。だらりと朱色の血が垂れ、そのまま突き刺したナイフを右方向に、力いっぱいスライドさせる。

マネキンAも俺に続き、ブッシュナイフの刃先で豚の首を切り刻む。声帯を切断されたのか、豚は声にならない呻き声を上げた。

ふと、上側に風圧を感じる。視線を移動させると――スレッジハンマーの頭部が、俺の傍らにまで迫って来ていた。

自滅を考えた、渾身の一撃。避けれるか――いや、無理だ近すぎる。

全てがスローモーションに見えた。そして、視野の隅に見えた人形の白い腕。不意に身体を押され――俺は、大理石の床に突き飛ばされた。

ぐちゃりと、トマトの潰れたような、鈍い音が聞こえる。視線を真正面に捉えると、豚は自ら振り下ろしたスレッジハンマーの頭部に叩き潰され、首周辺が潰されていた。そして、巻き添えになったマネキンAとマネキンC。きっと、先程俺を助けてくてたのは、マネキンCのお陰なんだろう。

死から逃れられた安堵と、人形に対する罪悪感に襲われる。俺があの時、ハンマーを避けられていたら、AはまだしもマネキンCが死ぬことは無かったのに……。

やがて二体のマネキンは消滅して、その場には無様な格好で息を引き取った、豚の化物が横たわっていた。なんともやり切れない気分だ。俺のゼブラパーカーは、豚の返り血によって赤く染まっている。

身体を動かしすぎたせいか、ひどく蒸し暑かった。上着を脱いで、金銀財宝が積まれた元まで歩み寄ると、部屋の向こう側に在った扉が一人でに開く。扉の先には、石の階段が続いていた。

猫耳っ子を檻から脱出させる手段はないかと、辺り周辺に視線を巡らす。ふと、銀色の鍵が部屋の隅に転がっているのが目に付き、拾い上げる。

鍵が合っているといいけど……。猫耳っ子を閉じ込める檻の鍵穴に、その銀の鍵を差し込むと――。

「お、開いた開いた」

なんの手応えもなく、鍵が回る。檻の扉をあけると、小柄な猫耳少女が、俺の胸に飛び込んできた。

――助けてよかった。津々とそう思っていると、猫耳少女が俺の青シャツを手で掴みながら、金色の瞳を潤ませ、礼を言う。

「……なんと礼を言ったらいいか。冒険者様が私を助けてくれなかったら、私は今頃、オークの餌と化していたでしょう。ああ、ありがとうございます」

あれ。なんか既視感というか、少女の一言一句がそれぞれが、何処かわざとらしいというか……。

そうか、これきっとあれだ。この状況が、ＲＰＧゲームとかでよく起きる、クエスト後のムービーイベントによく似ているんだ。向こうの世界ではゲームだったけど、今回は現実で実際に体験している。なんか、妙な感じ。

それは兎も角。可愛い猫耳少女に抱きつかれているんだ。文句は特にない。俺は手に持っていたファイティングナイフを豚の化物――いや、オーガと言ったほうが正しいだろうか――の方に投げ捨てると、両手を上の方に挙げながら、できる限りのイケメンボイスを作り出す。

「大した事はしていませんよ。もう大丈夫、貴方を悩ませる者は、もう居ません」

ここでイケメン野郎は、少女を抱き締めるんだろうが――俺には無理だ、苦行が過ぎる。

せめて、セクハラだと間違われないよう、少女の身体を触らないよう、両手を挙げる。別に女性経験が乏しいとか、そういうのじゃないから。いや、本当に。

「本当に、本当にありがとうございます。なにか、礼をさせてもらえないでしょうか。なんでもいいので」

……ＲＰＧゲームかよ。

事がトントン拍子で進んでいくぞ。このまま行くともしかしたら、魔王とかと戦う羽目になるのではないか、そんな気がしてならない。

まぁ丁度、自発的に動いてくれる仲間が欲しかった所だ。一応、ダメ元で言ってみよう。

「……ならば、僕と旅を共にしてくれないでしょうか」

「冒険者様と、ですか……。私、恐らく役に立ちませんよ」

「それでもです。実は、田舎の方から出発した身ですので、分からないことが多いんですよ。ですから貴方には、言わば僕のサポート役を頼まれて欲しいのです」

苦しい説明だと思う。それも、後半の方は殆ど無茶苦茶だし、これで納得してくれるだろうか。

ヒヤヒヤしながら、猫耳少女の応えを待つ。数秒後、意外にも少女は、首を縦に一度振った。

「承知しました。どんな命令にも従って見せます。これから何卒、よろしくお願いいたします。ご主人様」

猫は義理堅い生き物だと聞くが、どうやらそれは、デミ・ヒューマン（人）にも通用するようだ。

一先ず、仲間が出来たことを嬉しく思いながら――俺は、煌き合う金銀財宝の方に向かった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9643cr/

ダンジョン踏破目次録

2015年6月2日23時50分発行